

変わりつつある公園のかたち vol 2

～事例：国営飛鳥・平城宮跡歴史公園 平城宮跡区域～

はじめに

関西では、国営明石海峡公園神戸地区（あいな里山公園）の部分開園（平成28年5月）の記憶も新しい中、平成30年3月24日に国営飛鳥・平城宮跡歴史公園平城宮跡区域が一部開園しました。奈良県エリアと一体的に整備された公園の新規開園とその管理運営が話題となっています。



開園以前より奈良の代表的な景観の一つとなっている平城宮跡において、公園ならではの管理運営の考え方や取り組み等を確認するため、現地を視察するとともに、国営公園区域の維持管理運営にたずさわる平城宮跡管理センター室長へのインタビューを行ってきました。

国営平城宮跡歴史公園の概要

■開園の経緯・基本理念

国営平城宮跡歴史公園は、□号国営公園として、平成20年に「古都奈良の歴史的・文化的景観の中で、平城宮跡の保存と活用を通じて、「奈良時代を今に感じる」空間を創出する。」を基本理念として事業化されました。

※□号国営公園：国家的な記念事業として、やはり我が国有の優れた文化的資産の保存及び活用を図るために閣議の決定を経て設置する都市計画施設である公園又は緑地。

■管理運営

国営公園区域の維持管理運営は、市場化テスト制度により一般財団法人公園財団が代表を務める共同体が行っています。今回開園した区域以外の復原事業中を含む未整備区域については国土交通省や奈良県、文化庁等がそれぞれ管理を行っており、各管理者と連携を密に図りながら管理運営に努めています。

■文化財としての価値

ほんどの区域が特別史跡に指定され、世界遺産「古都奈良の文化財」の構成資産としても登録されています。国営公園の事業に先駆けて、平成10年に朱雀門や東院庭園が、平成22年に第一次大極殿が復原されています。

■イベント

歴史講座やウォーキングイベント、ツバメの観察会、野外ヨガなど週末を中心に多種多様なイベントを開催しています。また、奈良県や奈良市が主体となって実施する天平祭やたなばた祭りなどの季節の大型イベントでは、古代衣装を身にまとった行列や熱気球、燈花会などが行われています。

国営公園区域管理運営者：飛鳥・平城宮跡歴史公園サポート共同体 代表：一般財団法人公園財団
主な復原施設：朱雀門、第一次大極殿、第一次大極殿（復原工事中）、東院庭園
関係管理団体：国土交通省、文化庁、奈良文化財研究所、奈良県、奈良市



▼国営平城宮跡歴史公園開園の経緯

1952年（昭和27年）	特別史跡指定
1998年（平成10年）	文化庁による朱雀門、東院庭園の復原が完成
2008年（平成20年）	世界遺産「古都奈良の文化財」の構成資産として登録
2009年（平成21年）	国営公園（平城宮跡区域）の設置が閣議決定
2018年（平成30年）	国営公園部分と奈良県営公園部分を同時に一部開園

▼国営平城宮跡歴史公園の大型イベントと日程

天平祭	5月3日～5日
天平たなばた祭り	8月24日～26日
みづきうまし祭り	10月20日、21日
大立山まつり	1月26日、27日

（平成30年度の開催日）

平城宮跡管理センター室長 川原氏にインタビュー

平成30年8月31日（金）に平城宮跡管理センター室長の川原 淳氏にお話を伺いました。



▲川原 淳氏



▲インタビュー風景

◆国営飛鳥歴史公園との連携はありますか？また周辺施設や交通施設との連携は図られていますか？

企画展示やリーフレットで飛鳥地域を紹介したり、飛鳥、平城それぞれにゆかりあるプログラムを相互で行うなど、各種連携を図っています。周辺施設との連携は、寺社との連携が特長的です。平城宮にゆかりのある寺社が多くありますので、住職を招いた特別法話を開催したりしています。公園開園による周辺地域の活性化への期待が大きいため、地域を周遊するイベントや情報発信にも努めています。季節の良い時期には指定の観光施設で乗り捨てできるレンタサイクルの利用がお奨めです。

交通アクセスは、近鉄大和西大寺駅、新大宮駅から徒歩20～25分要すること、駐車場のキャバが少ないことが課題ですが、季節の大型イベント開催時には最寄駅と公園間のシャトルバスが運行されるほか、奈良公園方面から平城宮跡方面へ向かうるっとバスの社会実験も予定されており、さらなる利便性向上に期待をしています。

◆平城宮跡は歴史だけでなくススキの草原も大切な資源だと思いますが、今後どのように共存を図りますか？また、ススキの育成方法を教えて下さい。



▲ヨシ・オギ

秋風に草穂がなびく姿は公園の風物詩となっていますが、実はススキのように見える植物の多くはヨシやオギで、湿地帯にはヨシが、少し乾燥した場所にはオギが生育しています。この広かる草地空間は生き物の生息場所として重要で、多様な野鳥を観察することができます。なかでも夏期の夕暮れ時に5～6万羽のツバメが一斉にヨシ原に舞い降りる「ツバメのねぐら入り」は圧巻です。この草地環境を維持するために年1回の冬期草刈りをしていますが、この予算確保が課題となっています。

来園者層は、観光旅行や小学校高学年から中学校の学習旅行で多く利用していただいているほか、海外からお越しの方も徐々に増えています。また、ジョギングやウォーキングなど地域の方の日常的な利用も多くみられます。

◆まだ開園して間もないですが、公園の開園によって来園者数や来園者層に変化はありましたか？

平城宮いざない館は、9月末現在で約17万6千人に利用いただき、たくさんの評価の声をいただいています。また、文化庁が管理する朱雀門の利用者数は昨年よりも大きく増加しています。公園としては、宮跡全体のガイダンス施設として映像や模型を使ってわかりやすく展示している平城宮いざない館にて往時の平城宮や平城京について学び、その上で公園内各所の復原建物や遺跡を巡っていただきたいと考えています。そのため、これを補完するガイドサービス（事前予約制）を行っているほか、周遊スタンプラリー、A Rを使ったクイズラリー、奈良県指定管理者によるセグウェイ周遊プログラムなどの順次導入を計画しています。

来園者層は、観光旅行や小学校高学年から中学校の学習旅行で多く利用していただいているほか、海外からお越しの方も徐々に増えています。また、ジョギングやウォーキングなど地域の方の日常的な利用も多くみられます。

◆今後の展開ビジョンを教えてください。

県内の観光・インバウンド利用は着実に増加しています。その一方で奈良公園や東大寺に比べて平城宮跡歴史公園の認知度はまだ低く、まずはこれを押し上げることが必要です。公園独自の広報活動はもとより、観光キャンペーンへの参画、旅行会社や行政団体等からの視察対応の受入れ、国際会議の誘致など、県や市の観光部局や関係機関と連携を図り各種広報に取り組みます。

次に歴史ファンの満足度を高める取組みと来園者のすそ野を広げる取組み、双方についてバランスを取りながら進めます。特に後者は、たとえばこどもたちや若い世代に人気のある熱気球の体験搭乗企画をして平城の都を俯瞰してもらったり、あるいは地元クラブと連携して幅74mの朱雀大路で小さな子どもたちとサッカーを楽しむ教室も現在企画中です。このように、まず公園に足を運んでもらうきっかけづくりを積極的に進めます。

平城宮跡管理センターの目標は、「歴史・文化資産の保全・活用」、「観光利用」、「日常利用」の3つを念頭に、歴史と文化を紡ぎながら地域とともに世界に誇る公園に育てていくことです。全国各地の公園管理運営にたずさわり、毎年海外の公園視察も行なうなどグローバルな視点を持つ組織の強みと、地域に密着したローカルの視点を重ねあわせた各種取組みが、公園はもとより地域全体の活性化につながると考えています。

◆公園設計で特に配慮した点、工夫した点はありますか？



▲平城宮いざない館



▲天平たなばた祭り【熱気球イベント】
▲天平たなばた祭り【食のイベント】
▲天平たなばた祭り【アートバーグ作品展】

編集・構成 友國慎也、坂田奈美子

話題の駅前広場に行ってきました

～天理駅前広場 CoFuFun～

はじめに

天理市は、「産業・観光振興」「にぎわいづくり」「文化・音楽発信」の3本柱に、市のにぎわい拠点として駅前広場空間を整備されました。その立地性、デザイン性、活用性に興味を持ち、今回の視察に至りました。

「CoFuFun」の概要

■CoFuFunとは

奈良県天理市にあるJR・近鉄天理駅の駅前広場は、まちの元気をつなぐ、にぎわいづくりの拠点です。広場は天理市の「歴史」「地理」「文化」という3つの要素を凝縮したデザインとするため、市内に約1600基も点在しながら日常生活に溶け込んでいる「古墳」をアイコンとして選びました。

古墳を想起する野外ステージや大型遊具、カフェや観光案内などの機能を備え、イベントの開催や観光・ものづくり、農業情報の発信、近隣住民の憩いの場として活用されることで、周辺地域のにぎわいの循環を生むことを目的としています。

天理の芸術文化、スポーツ、ものづくり、教養、そして子どもから高齢者までが絆をもって共に暮らしてきた日々の価値を、いまみんなで共有し、新たな価値を生み出していく。天理駅前広場はその拠点となります。

（CoFuFun公式ウェブページからの抜粋）

■施設概要

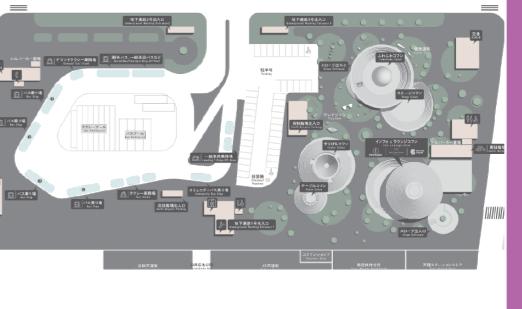
所在地：奈良県天理市川原城803

事業者：天理市

主要用途：駅前広場

竣工：2017年3月

規模：敷地面積 7,702.4m²



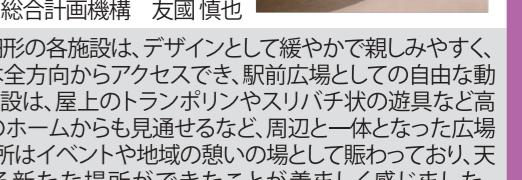
CoFuFun 視察後の広報委員の感想

円形古墳をアイコンとして表現している広場は、全体が白で統一されると同時に、空間に対しての古墳のボリューム・バランスと配置が良いことで、全体的に圧迫感が無く、心地よい景観が展開していると思いました。古墳が段状になっているため、古墳同士が連結する段部や上部と下部が連結する段部、プレキャスト構造物としての曲線の線形、サンインテリアの統一感等、細部にまでキメの細かい納まりが非常に参考になりました。また、時間の経過と共に移り変わる段部の陰影デザインが幻想的な景観を演出していました。（株）空間創研 坂田隆久



天理駅を降りるとすぐに、屋上トランポリンなどの遊具やカフェ、海外ブランドの自転車販売など、子どもから大人まで楽しめる仕掛けを見ることができます。デザインのアイコンになっている「古墳」は、考古学や歴史学の観点から語られる少し難しいイメージを抱いていましたが、まちのランドスケープになると、この地域に千年前以上の遺跡がたくさん残していることを知つたり歴史について考えるきっかけになるのではないかと思いました。（株）都市景観設計 坂田奈美子

最初の印象は、古墳のモチーフにインパクトがあり、建築的な空間だなと思っていた。実際に現地を見てみると、「使われる場」を目指している空間であることが分かりました。そのアイデアとして、その場の使い方を明示していることや、備品や使用ルール等を分かりやすくHPで公開していること、駅中の待合室を外と同じデザイン性にして、中と外を繋いでいることなど。ユーザーから見た時の場所の使い方の分かりやすさは、同じ「ブリックスペース」として公園分野でも応用できると思いました。（株）総合計画機構 友國慎也



天理市「古墳」をイメージした円形の各施設は、デザインとして緩やかで親しみやすく、広場の大半を占めるものの、基本全方位からアクセスでき、駅前広場としての自由な動線が確保されていました。また施設は、屋上のトランポリンやスリーパー状の遊具など高低差が有効に活用され、天理駅のホームからも見通せるなど、周辺と一緒にした広場となっていました。なにより、待合所はイベントや地域の憩いの場として賑わっており、天理駅前広場として他人に誇れる新たな場所ができることが羨ましく感じました。（株）ニュージェック 増田将典



古墳をモチーフにした構造物の白色、芝生や高木のみどり色、そして色味を抑えた遊具と舗装材の茶色、遠方の山並みや空の青色と一緒に、とても落ち着ける場所だった。夕暮れ時に暖かみのあるオレンジの色の小さな照明の光が広場のあちらこちらで点灯始めると、階段状のコブの丘に座って静かに語り合う若者の姿も見受けられた。色がつくことで設計当初と出来上がりのイメージが変わってしまうことがあるが、色彩計画が十分になされ景観に配慮した好事例の広場空間だった。（株）環境緑地設計研究所 山崎由記美

編集・構成 莊田 隆久